沖縄国際大学人間福祉研究　第3巻　第1号　2005年3月

樹木画の対提示による心理アセスメントに関する実習の試み
—臨床心理基礎実習におけるバウムテストの解釈に関する実習—

沖縄国際大学総合文化学部
人間福祉学科　片　本　恵　利

1．はじめに

（1）問題の設定と本稿の目的

臨床心理士に求められる資質能力のうち最も重要なもののひとつとして、心理査定（アセスメント）ができることが挙げられ、全国の臨床心理士養成指定大学院のカリキュラムでも最重要視されている領域である。しかしながら、心理アセスメントに関する教育は難しいことでも知られている。

これまで、大学および大学院の教育では検査を紹介し学生が自ら研究するきっかけを与え、学生が数をこなしていくことで習熟していくのがよい、またそれが大学での教育の限界であるとの考え方が一般的であった。わが国における心理に関する教育の典型的な組み立ては、検査の簡単な紹介、実施法の（最低限の）説明、ロールプレイや被検者を募っての被検者・検査者体験、スコアリング、所見の作成・報告、詳しい解説、検査実施の留意点として心理面接での心理査定の活用法、倫理面、効用と限界、危険性、テスト・バッテリー、などの講義となるものが多いようである。

多くの実習生は、おおむねこのようなカリキュラムに沿って訓練を受け、概略と実施法の説明に続いて被検者・検査者体験をし、解説書を参照しながら解釈仮説を立てて所見を書く訓練をする。

心理アセスメント解説書の典型的な組み立ては、検査の簡単な紹介、実施法の（最低限の）説明、スコアリング、解釈の仕方の説明、詳しい解説、検査実施の留意点として心理面接での心理査定の活用法、倫理面、効用と限界、危険性、テスト・バッテリーなどへの言及、となっており、解釈の項で、発達・病名・学校場面で見られる問題行動等固有の切り口による分類に基づいた多数の作品の提示および解説と事例ごとの比較、事例の経過等の呈示が個々の解説書の個性となっている。

多くの実習生が、解説書に基づき解釈仮説を立てる段階でつまずいてしまう。理由として考えられることを挙げてみる。

・解説書に載っていない特徴をどう捉えればよいのか分からない。
・解説書にある解釈を鵜呑みにしてしまう。
・複数の解説書の記述を切り貼りしただけで終わってしまう。
・解説書にある解釈方法が唐突なものに思え納得できない。
・複数の解説書で解釈が違った場合、どう折り合いをつけてよいのか分からない。
・犯罪者や病気の人の事例が多く、被検者にあてはめられるのか分からない。
・一つの特徴から導き出される解釈が何通りもある場合、どれを選んでよいか分からない。

このように、実習生は、作品やプロトコルに入り込んで体験し主体的に味わい、まとまりのある所見を書くという作業をどう組み立ててよいか分からず途方にくれてしまう。

臨床心理士への社会的ニーズの高まりにより臨床心理士養成指定大学院制度が始まり、修士の2年間で臨床家の基礎を身につけさせる必要がある昨今、「あとは100例くらい徹底的に体験しなさい」と言って終わらせるわけにもいかない。解説書と実際の検査結果をつなぐものが必要と思われる。

筆者は、樹木画の対提示を用いることで、倫理的な侵襲は少なく、初学者のこころが動き、主体的に描画作品を味わい解釈仮説を立てるための大きな一歩を踏み出すきっかけを提供できると考え、授業に取り入れている。

本稿では、筆者の担当する「臨床心理基礎実習」における架空の樹木画作品の対提示を用いた解釈仮説の立て方の実習を報告し、初学者への心理アセスメントに関する実習について考察する。

（2）筆者の所属する大学における心理査定に関する教育

筆者の所属する大学（以下、本学）には、総合文化学部人間福祉学科の中に心理カウンセリング専攻があり、この学科専攻を基盤とする教育課程として、地域文化研究科人間福祉専攻臨床心理学領域がある。同領域は、臨床心理士養成大学院2種の指定を受けている。筆者は、大学院では、「臨床心理基礎実習」（以下、「基礎実習」と略す）担当者3名のうち1人として（オムニバスではなく毎回を複数で）担当している。（以上、平成16年度の担当教科）

（3）基礎実習の概要

1）基礎実習の内容　上記科目は、2単位・90分2コマの授業で、内容は、以下のとおりである。

①臨床心理学の基本的なかかわり方に関する実習
②臨床心理学外実習　～事前指導・学外実習・事後指導
③心理アセスメントに関する実習

④相談室運営に関する実習

⑤学内実習

⑥地域に根ざした心理臨床のあり方に関する実習

⑦動作法による障害児・者との関わりに関する実習

⑧その他、学内外での心理臨床に関する講演、研修などへの参加

2）本学大学院生の心理査定への習熟

筆者らは毎年、基礎実習初回に、実習生のレディネスとニーズの把握のためにアンケートを実施している。このアンケートから心理検査および心理療法の諸技法への習熟に関するデータを抜粋・整理し、以下に示す。

	名前を知っている		習った・勉強した		実際の場面で使える		所見レポートが書ける		備考	
	03*	04*	03	04	03	04	03	04	03 計**	04 計
バウムテスト	4	2	2	4	1	0	0	0	7	6
LMT	1	2	0	0	0	0	0	0	1	2
発達検査（K 式など）	2	2	0	3	0	(1)	1	0	3	6
ビネー式知能検査	4	1	0	5	1	(1)	1	0	6	6
WAIS	3	2	0	3	0	0	2	0	5	5
SCT	4	1	0	0	0	1	0	0	4	2
YG テスト	3	3	1	3	1	0	1	0	6	6
エゴグラム	3	3	1	3	1	0	2	0	7	6
ロールシャッハテスト	4	2	2	3	0	0	1	0	7	5
TAT	5	2	1	3	0	0	0	0	6	5
遊戯療法	4	5	2	1	1	0	0	0	7	6
箱庭療法	5	5	1	1	(1)	0	0	0	7	6
エンカウンターグループ	6	2	0	3	0	0	1	0	7	5
サイコドラマ	3	5	2	1	1	0	0	0	6	6
芸術療法・表現療法	6	2	1	1	0	0	0	0	7	3

＊「03」「04」はそれぞれ実施した年度。

＊＊「計」は、少しでも当該検査または技法を知っていると答えた人数の合計。

ほとんどの大学院生が、修士１年当初には、心理検査や心理療法の諸技法について、名前を知っている程度である。本大学院では２年次に「心理査定演習」を履修するが、基礎実習においても、心理検査について基本的な実施方法、解釈法の訓練が必要となってくることが分かる。

本学では心理カウンセリング専攻の学科ができて４年目、大学院は２年目であり、先輩

が後輩を被検者として実習を行い、後輩はまず被検者体験から実習に入るシステムは確立できていないが、今年度は、前期の早い時期に本学の心理相談室に勤務する嘱託相談員が大学院生のバウムテストおよび風景構成法、ロールシャッハ・テストを実施し、大学院生はまず被検者体験から入り自らのプロトコルやデータを持っておけるようにした。

②実習の組み立て

心理アセスメントに関する実習として、次の内容を組んでいる。

ⅰ）架空の心理検査（画用紙と鉛筆を用意し「まるを一つと、四角を一つ描いてください。」と教示する）を用いた、心理検査の理論的背景、実施法の基礎や倫理の学習

ⅱ）バウムテストのロールプレイ

ⅲ）樹木画の対提示を用いた解釈の基礎の実習

ⅳ）ロールプレイでの作品の所見、プレゼンテーションに基づく解釈の実際に関する実習

ⅴ）LMT の解釈の実際に関する実習

本稿では、このうちⅲ）について詳しく述べていく。

③心理査定に関する実習におけるバウムテストの位置づけ

バウムテストは、K.Koch.（1949）の、"Der Baumtest: Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisces Hilfsmittel" により、世に出された。このテストの解釈は、形態分析、動態分析、空間象徴の解釈の三側面からなる。林ら（1970）は、「バウム・テストを解釈し判定するときには、かかれた樹木のかたちを分析（形態分析）し、次に鉛筆のうごきを観察（動態分析）し、これに加えて樹木の紙面における配置（空間象徴）の意味を読み取るべきである。」（中略）「実際にわれわれがバウム・テストを解釈するときには、これら三つの側面からの観察が同時に行われ、直観的に判定が可能である。これは樹木画に限らず絵画を鑑賞するときの心情と変わらぬ。が精神診断学的補助手段としてバウム・テストを使用するためには、鑑賞するものの心情に左右されることなく、判定するものの個体差を超えて普遍的なものでなくてはならない。」と述べている。

本大学院では、夏期休暇中の学外実習に備えて基本的な心理テストの実施と解釈の手がかりは持って現場に立てるよう、心理査定の基本的な事項を確認する意味で、前期のうちに心理アセスメントに関する実習を設けている。専門家として現場に立つには、ロールシャッハを少なくとも先輩の指導を受けながら所見が書ける程度には習熟しなければならないだろうが、ここでは、修士１年生前半での心理査定への導入として、バウムテストを用いている。実施・スコアリング自体は複雑でなく時間もかからないこと、現場での活用頻度が高いこと、

投影法のスタンダードとして認められており活用・研究の歴史も長いこと、描かれた木から描いた人のパーソナリティを推しはかるという行為が比較的実習生にとってなじみやすいと考えられることが、主な理由である。

2．実習の流れ

以下、「　　」は平成15年度・16年度実習参加者の発言の例（文意を変えない程度に表現は筆者がまとめた）。〈　　〉は筆者の発言。基礎実習のうちこの回は筆者が司会進行を担当し、他の担当教員は適宜コメントを加える形で参加している。

（前の回までの準備）バウム・テストの概略を説明した資料*を配布し、自分が検査者となったバウムテストの解釈所見を宿題として課す。

＊資料は、バウムテストの起源・歴史、実施法、解釈仮説の立て方、参考図書を記したＢ４版２ページのもの。

（この回に準備する教材）対提示のための描画12枚、プロジェクター。描画はすべて筆者が教材用に作成したもので、よく似ているがいくつかの点が違っている樹木画一対と、対照的な印象を与える樹木画５組からなる。受講者には提示が終わるまで描画の出典は知らされない。

１）バウムテストの所見作成に関する質問・感想を聞く。

上述のような戸惑いや疑問が示される。

２）今回の実習の進め方の説明

〈今から、いくつかの作品を見ながら、解釈仮説の立て方を体験していただきます。作品だけを見て被検者のパーソナリティを決めつけるわけにはいきませんので今日出た解釈仮説はあくまで仮のものです。逆に言えば、決まった答え・正解はありませんので、思ったこと感じたことを自由に発言してください。さまざまな意見が出ることでお互いに学びあう場にしたいと思います。〉

3）図１を提示

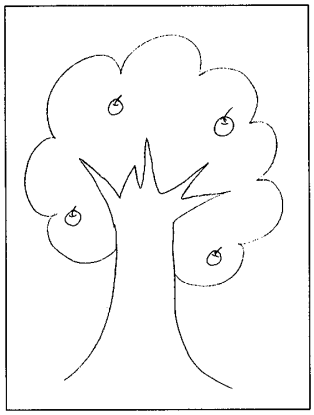
〈この絵から、どんなことが分かりますか。描いたのはどんな人だと思いますか〉

実習生はあまり答えない。

「被検者の描いたのがこのような木で、解釈に困った」

「どうということがなく普通としかいえない」

「これで所見を書けといわれてもどうしていいか分からない」といった感想があがる。



（図１）

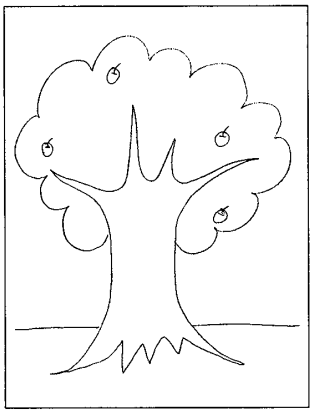
〈典型的なありふれた木の絵ですね。いきなりこれを解釈しなさいといわれたら困りますね。では、この絵をもう一度よく見て、次の絵とどこが違うか教えてください。〉

4）図２を提示。

「根っこがある」

「地面の線がある」

〈そうですね。２枚目の絵は、今挙げて頂いた２点が違っています。その違いに注目して、もう一度２枚の絵を見比べてみてください。違う感じを受けますか〉



（図２）

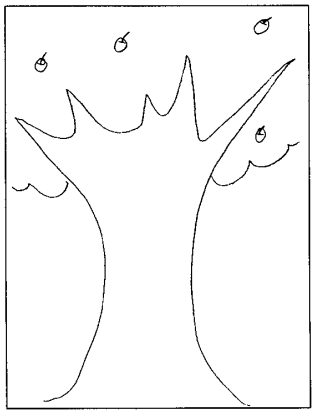
5）図１、図２を交互に提示。２度ほど繰り返す。

〈２枚目は、１枚目に比べてどんな感じがしますか。〉

「しっかりしている」

「安定している」

「地に足がついている」などの感想があがる。



（図３）

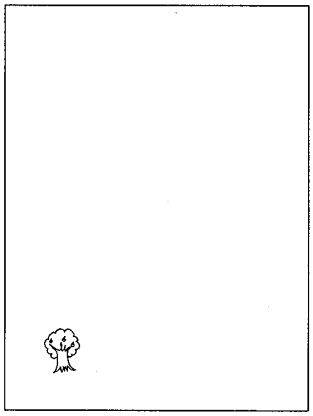
〈そうですね。１枚ではどう解釈していいか分からなくても、こちらの絵に比べてこちらのほうがこういう感じがする、と言うことはできますね。皆さんが見た解説書の解釈仮説は、一本の木の絵にその人らしさが表れる、という考えに基づいて作られたテストを、たくさんの人が長い年月をかけて、膨大な量の木の絵を比較分析した積み重ねの上にできたものなのです。本を見ると唐突に思ったものもあるかと思いますが、膨大なデータに基づいて、こういうものはこういう傾向があるという仮説が立てられる、と

いうものなのです。

これから、今のようにいくつかの絵を見比べながら解釈仮説の立て方を体験的に学んでいきます。〉

6）図3を提示。

〈この絵はどんな感じがしますか。次の絵と比べてどう違うでしょうか。〉



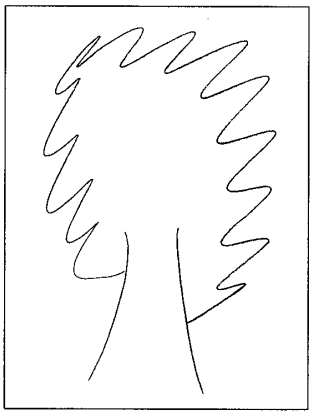
（図4）

7）図4を提示。

〈こんな絵を描く人も、実際にいます。実物大です。〉

(少しあっけにとられたような反応)

8）再び図3を提示。



（図5）

〈この絵は、もうひとつに比べて、どんな感じがしますか。これを描いた人は、どんな人でしょう。〉

「のびのびしている」「自信がある」

「あまり考えないで描いている」

〈てっぺんはどうなっていますか〉

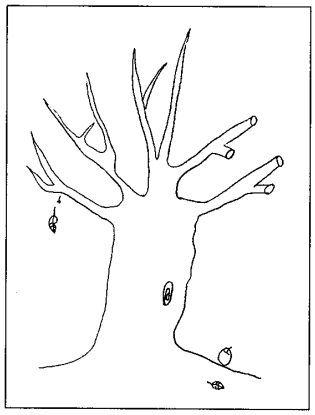
「はみ出ている」

〈はみ出ているものは、最初の絵、小さい絵と比べてどんな感じがしますか。〉

「自分はできる、と思っている」「紙の中に収められない」「自分を大きく見せたい、見えないところもある、って言いたい」

〈このように上方へはみ出す絵を描く人は、必ずというわけではありませんが、自信過剰、自己愛的、と考えられる場合もあります。〉

9）図4を提示



（図6）

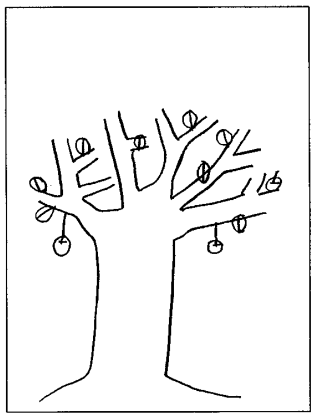
〈では、こちらの小さい絵はどうですか〉

「引っ込み思案」「不安・自信がない」「引きこもり」「ひとりぼっち」

〈では、この小さい絵が、左上・右上・右下・真ん中にあるときと比べて、この左下にあるのはどんな違いがありそうですか。資料の空間象徴も参照して、考えてみてください。〉

「上にあると浮いているみたいで現実味がない」

「右より左が引っ込んでいる感じ」



（図7）

10）図5・6を交互に数回繰り返して提示

（以下、図の提示は同様の方法で行う）。

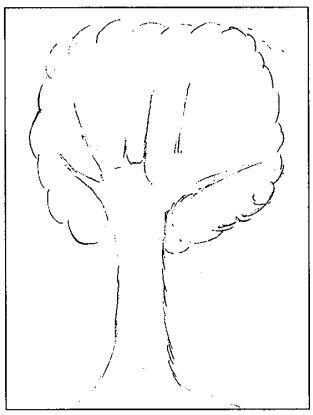
図5「やる気がない」「乱暴」「あまりこだわらない」

〈もし、不登校の息子のことで、というお母さんに連れられてきた中学生がこのような絵を数秒で描き、もういいだろうと言う表情でこちらを見たら、どんな感じがしますか〉

「いやいや連れてこられたのかな」

〈そういう時、どのようなことに気をつけますか〉

「まずラポートづくりに気をつけます」「無理に聞かないようにします」



（図8）

図6「枝がとがってて洞もあって傷ついてる感じ」「右側が切れているのが気になる」「実が落ちている」「寂しそう」「疲れている」「むなしい感じ」

〈この方は、自分の傷つきや空しさを訴えている感じでしょうか。右側が全部切れていて左がとがっているのは、ひょっとして何か傷つき体験があって、内側に攻撃性を秘めているのかもしれません。もちろん、そうでないかもしれませんが。〉

11）図7・8を提示。

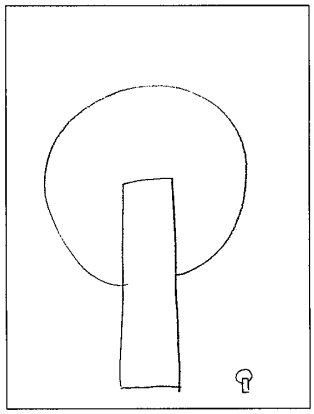
図7「力強い」「開けっぴろげ」「単純」

図8「はかない感じ」「弱々しい」「自信がない」

〈図7の枝や実はどんな感じがしますか〉〈図7の絵の発達水準はどのくらいだと思いますか。大人がこのような木を描いたら、どう考えますか。〉

「小学生くらい？」「閉じてない」「直角についている」

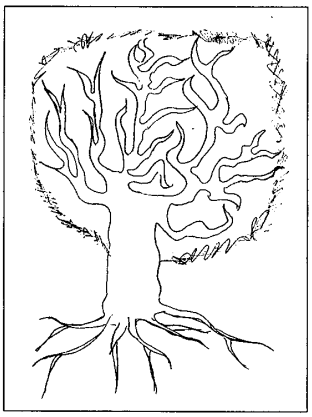
〈枝が閉じていなくて、下からわいてきたものがそのまま外に出そうな感じですね。てんかん病棟にいる方でこのような絵を描く方があります。もちろん、てんかんだからこのような絵を描くとか、このような絵を描く人がてんかんだと言うわけではありません。〉



（図9）

〈図7と8は、運筆による動態分析の潤筆・渇筆、強圧・弱圧に当

たります。〉



(図 10)

12) 図 9・図 10 を提示。

図 9「単純」「幼い」

図 10（びっくりしたような反応をする。）

「怖い」「枝がひらひらしてて気持ち悪い」

〈図 9 は何歳くらいの人が描きそうでしょうか〉

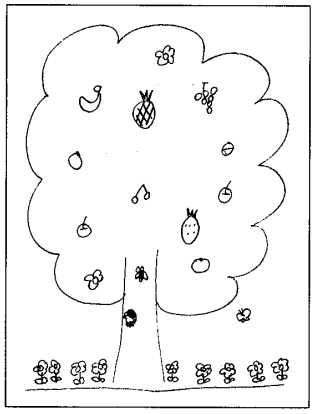
「幼稚園くらい？」

〈描画から発達段階を推し量ることもできます。ちなみに、子どもはこの絵の右下にあるようなペアをよく描きます。補助自我という見方もできます〉

〈さて、図 10 のような絵をインテークで初対面の人が密室で描いたら、かなり大変な感じがしますよね。20 代の女性が「職場の人間関係のことで」という主訴で来談してこの絵を描いたとしたら、この人の病態水準、見立てはどうなりそうでしょうか。こういうとき、どのようなことに気をつけますか〉

「精神病圏？」「人格障害？」「大変そう」「巻き込まれないように」

(他の教員)「こういう絵を描く人だったら、まず境界例を疑います。境界例は現実検討がしっかりしているところとできていないところが混在しているのが一つの特徴なので、この根っこの詳しさと枝の異様さのミスマッチがそう感じさせます。こういう方と会うことになったら、まず時間や場所の枠をしっかり守ることを心がけます。」



(図 11)(注)

13) 図 11・図 12 を提示。

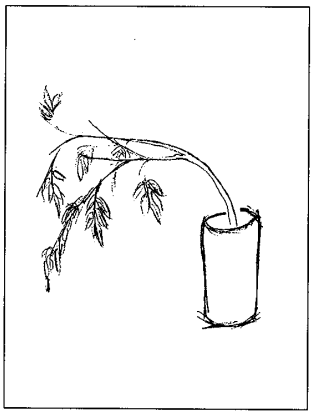
図 11「楽しそう」「子どもが描いたのかな」「夢がある」

〈もし、事前の情報で、この人の現実の生活は幸せとは程遠いと言うことが分かっていたら、この絵をどう考えますか〉

「空想に逃避している」「願望充足」

〈描画には、単純な現実生活の反映でなく、願望が表現されることもあります。〉

(注) 幹の上部は昆虫 (せみ)、中ほどは黒く塗りつぶした洞から小鳥がのぞいている。



(図 12)

図 12「元気がない」「絶望」「諦め」「うつ？」「自殺する？」

〈この木は、これからどうなると思いますか〉
「枯れる」「先がない」〈もう切り取られているわけですから、誰かが挿し木でもしてくれない限りまず生き延びられませんね。自分の人生を諦め人にゆだねるしかない感じでしょうか。絶望と自殺の話が出ましたが、絶望と諦めは何が違うのでしょう。例えば、自分を大リーグ選手やトップモデルと比べて絶望する人はいますか〉
(絶望しない。と言う反応)〈絶望には希望が含まれます。野心があるから絶望するのです。この人は自殺しそうでしょうか〉
「その気力もないかも。」
〈もうひとつ注意を促したいことがあります。花瓶にいけられた枝を描く人は珍しいですし、特別な意味合いがありそうですが、もし、この人が華道の先生だったらどうでしょう。変わった絵だからこの人が変わっている、病的だ、と考える前に、その人の生活に思いをはせてください。高校生が盆栽を描いたら相当変わっているでしょうが、植木屋の息子なら珍しくないかもしれません。椰子の木は変わったアイテムとされ、攻撃性などの検討がされますが、沖縄では本土ほど椰子は珍しくありません。本土の人でも、ひょっとしたら、ハワイへの家族旅行を思い出して描いたのかもしれません。もしそうならば、すぐに攻撃性を検討するより、その人にとってハワイ旅行がどんなものだったか想像するほうが役立ちそうではありませんか。〉

ここで対提示は一通り終わる。時間を見て、補足をする。

14) 再び図1を提示

〈いくつかの絵を見て一緒に考えてきました。ここで、もう一度この絵を見てください。20代の女性がインテークでこの絵を描いたとすると、この人の知的側面、病態水準、対人関係はどのようなものだと思いますか。〉「知的には標準で、健常レベル、対人関係は当り障りなくやっている」「バリアを張っている」
〈このように、ある程度の描画の例をもとに比較検討しながら、病態水準、知的側面、対人関係などの切り口からひとつの描画を見、所見を書くわけです。〉
〈バリア、というのは重要なことをおっしゃっています。もう一度この絵と比較してください。〉

15) 図5を提示

〈この絵(図5)を描いたのが先ほどの例の中学生として、最初の絵(図1)を描いた女性と、2回目以降、話が続きそうなのはどちらでしょうか。〉

「もし来てくれたら、中学生の方。」「最初の絵の人は、表面的なことで話が終わって沈黙になりそう。」
〈この、最初の絵を描いた人のようなバリアを張ることを何と言いますか〉
「防衛。」
〈そうですね。表面的にどういう態度をとるかということと、ラポートの形成は、単純には考えられません。〉〈どのような絵を描くかには、描く人と検査者との関係が必ず反映されます。描かれた絵には、検査者自身の態度や力量が表れているのです。作品を見るとき、描いた人だけについて何か言うことはできません。必ず自分に跳ね返ってきます。〉

16) 描画の出典について説明する。
〈ところで、今日お見せした作品は、全て、私がこれまでの経験に基づいて描いた架空のものです。このことから分かることは、一人の人が描ける絵は無限にあり、たまたま検査場面ではそのうちのひとつが表現されるに過ぎないということと、一人の人がどのような絵でもかけるということから、嘘をつこうと思えばうその絵を描くこともできるということです。このことから、検査者が気をつけるべきことは何だとおもいますか〉
「強制しないこと」「ラポート作り」「結果を決めつけないこと」

実習生の感想を求めたのち、他の教員がコメントなどを加えてまとめ、この回は終了する。

3．実習生の反応

この実習だけで実習生がアセスメント能力を十分身につけることは不可能だが、前項の3）と14）で、同一の描画を見て実習生の出す反応が深まっていることから、わずかな時間で、実習生が描画に主体的に関わる手立てを身に着けつつあることがうかがわれる。

また、この実習の後、実習生がこの実習をもとに、自らが関わった事例で、描画のアイテムの特徴と対照的なアイテムを仮想し比較し解釈仮説を出していくとよく分かるようになったという報告があった。この実習生とともにその事例に関わった相談室の他のスタッフも、対照的なアイテムを仮想することでイメージを助けられた、と感想を述べている。

4．考察

（1）心理アセスメントに関する教育における刺激や事例の提示について

臨床心理士の倫理綱領では、査定およびその技法、用具について次のように定められてい

る。

「臨床心理士は来談者の人権に留意し、査定を強制してはならない。またその技法をみだりに使用しないこと。査定結果が誤用・悪用されないように配慮を怠ってはならない。

臨床心理士は査定技法の開発、出版、利用の際、その用具や説明書等をみだりに頒布することを慎むこと。」(臨床心理士倫理綱領第４条)

これに反して、わが国の大学では、学部での心理アセスメントに関する授業が、ただ検査の分類と図版・質問紙やおおよその実施法の提示に終わってしまう例が散見され、倫理面で問題とすら考えられる事態が危惧される。たとえば学部教育で、心理検査の紹介としてロールシャッハ・テストの図版を、実際に現場で使用するとは限らない多数の学生に提示してしまい、当該学生にとってロールシャッハ・テストが機能するために最も重要な「被検者にとって見慣れない、あいまいな刺激」という条件が阻害されてしまうことがこれまでにあったようである。筆者は、不利益をこうむる人がないように十分検討し、かつ有意義であると判断した上でなければ、なまの刺激図版や事例の提示は学部の段階ではなるべく行わないほうがよいと考える。刺激図版等の提示は上述の倫理綱領の問題と関わってくるし、なまの事例を用いることは、学部の段階では解釈の誤用の危険性が高いことと、症例と自分や身近な人を引き比べて短絡する学生がいる可能性のフォローが難しいと考えられるからである。公刊されている図書等から教材を持ってくるならまだ良いかも知れないが、事例のインパクトは強く、あとで短絡を強く戒めても伝わらなかったり、逆に、短絡してはいけないことを強調しすぎて何も言わないことと同じになってしまうという矛盾に悩まされることになったりする。教育者の工夫によってなまの刺激や事例を使わないで教育効果を上げる方法を考えていくべきではないか。

こうした視点から、筆者は自身が作成した架空の樹木画作品の対提示による解釈仮説の立て方の体験的な学習を実践している。その特徴を、次項に挙げる。

（２）樹木画の対提示を用いた実習で実習生が体験すること

①　１枚目の典型的な樹木画の提示では、実習生は解釈を立てづらいという体験をする。

②　続いて、似ているが違う部分がある２枚目を提示することで、２枚の比較により個々の絵は「どちらかというと」このような傾向がある、という仮説を立てられるようになってくる。ここで、実習生は、多数のデータの比較分析が解釈仮説を組み立てる基本になることを実感する。

③　このあと、対照的な印象を与える樹木画の対提示により、実習生は、樹木画におけるさまざまな次元での表現の幅広さを体験する。極端な例を提示することで、それぞれの描画作品の特徴をより鮮明に感じることができ、描画作品を味わうことに没入していけるようにな

る。12 枚の描画作品の特徴は、大きさ、位置、運筆、各アイテムの表現など、バウムテストの解釈の三側面をカバーするものである。

④　一通り対提示が終わったところで最初の作品を再度提示す解釈の切り口をヒントとして出すと、実習生は最初に提示されたときより詳細で構造化された仮説を組み立てられるようになっている。

⑤　さらに、いくつかの描画作品を最初と違うペアで提示し、倫理面や検査者―被検者関係など、心理査定の基礎に関する補足が行われる。

（3）描画の対提示による心理アセスメントに関する実習の特徴

①体験的に心理検査の成り立ちについて学習できる。

標準化された心理検査は理論的背景と膨大なデータに基づいて解釈仮説が提出されているが、実習生はそのことがまず実感できていない。

心理検査の解釈仮説構築を追体験をするには、グループ作業で描画の各アイテムの例を可能な限り出し、KJ 法などで分類しながら指標を整理していく方法なども考えられる。この方法は本格的な心理検査法や研究法の学習に効果があると考えられるが、時間がかかるので、基礎実習では用いないことにした。

樹木画の対提示を用いてペアの描画との比較に基づいて解釈仮説を立てることで、実習生は解釈仮説が膨大なデータの比較に基づく相対的なものであることを洞察し、限られた時間の中でも心理検査および解釈仮説はどうつくられるのかを体験的に学べる。

②心理検査の解釈仮説の立て方を体験的に学習できる。

心理検査は、検査者が被検者のこころに寄り添い追体験することからうまれる共感性に基づいたアセスメントにつなげられるべきものであり、検査者が「こころを使う」ことなしには治療的意味のある見立ては導かれ得ない。KOCH.(1970) によると、「樹木画は全体として直観的にとらえられる。細部までの検討をしなくても、われわれは、整っているとか、不安定であるとか、空虚な感じだとか、大胆であるとか、充実しているとかいった印象を受けることができる（中略)、これはまた、このテストを学ぶ第一段階である。われわれは、莫大な数の樹木画に対して自分を受身の形におき、それらをただ眺めることからやがてみることに変わり、特徴がはっきりしてくると、絵が分化しはじめ、診断者は被験者とより密接な関係になる。絵を表に照らして図式的に解釈するのはこの瞬間からであり、それ以前にはなすべきではない。そして、ここから解釈がはじまるのである。」

しかし実習生は、描画作品を前にしても極めて素朴な感想と印象を抱くにとどまり自らを作品の中に没入させることができなかったり、自らの抱いた印象から解釈仮説を導くための方略が分からなかったりして戸惑うのである。

筆者がこの回の実習で目指していることは、描画を前にした実習生の「こころが動く」きっかけを作ることである。従って、実習の中では、解釈について網羅的に触れることより、実習生が主体的に自ら解説書を読みこなし解釈仮説の立て方の学習ができる素地をつくることを重視している。実習生の検査体験と解説書の橋渡しをし、実習生が自らのこころを使ってアセスメントを立てる作業に向かわせるのである。

③心理検査実施の基礎全般について体験的に学習できる。

対提示と発問、コメントにより、限られた描画作品から、検査者―被検者関係、防衛、倫理等、心理検査実施の基礎を一通り、実感を持って学ぶことができる。

④筆者が描いた架空の描画作品を用いることで、学習に柔軟に活用できる。

KOCHは、バウムテストは人格診断の補助的手段であるべきだとし、blind analysisを強く戒めた。最も誠実な心理検査の習熟法は、ひたすら膨大な量の作品やプロトコルを味わうことであろうが、現実の制約が初学者に全ての検査でそのような学習方法をとることを許さない。限られた事例やきっかけからある程度基礎をカバーできるような学習方法の工夫が求められる。しかし現実の事例では、事例を離れた仮説や空想は許されない。その点、現実に縛られない作品を用いることで、あくまで仮定の話であると前置きをしたうえで、「もしこの人が…だったら」という発問をすることもできる。なまの事例でないため、被検者への倫理的侵襲は避けられる。

この作品から筆者のパーソナリティが見える可能性は否定できないが、対提示終了後、筆者が臨床経験に基づいて描いたものであることを説明することで筆者のなまの人格は表れていないことが伝えられるし、被検者を危険にさらすよりは自らで責任の取れる刺激を選ぶほうがましだと筆者は考える。

⑤受講者のレディネス、志向、授業時間によって学習内容を工夫できる。

筆者は、対提示を用いた心理査定教育を、学部学生の教職課程履修者を対象とする科目でも行っている。ただし、学部学生への講義では、対提示による体験的学習のあと、〈聴診器を使えば誰でも心臓の音が聞けるのに、なぜあなたは聴診器を使わないのか〉と発問し、「音は聞けても判断できない」などの意見が出されたところで、木の絵を描いてもらうことは比較的たやすいが、それを適切に生かすことができるためには、十分な訓練が必要なことを述べる。このような工夫で、心理臨床家を志向しない学部学生を対象として、専門的な内容には触れずに心理検査の基礎、効用と限界、倫理等について一通り体験的に学習させることが可能である。

学部の授業で提出されるアンケートやレポートから、学部生の受講者も、受講前は心理ゲームと同類として心理検査を面白がる感覚を持っていたのが、講義によって、検査の奥深さや危険性、専門家の必要性を実感していることがうかがわれる。

（4）課題

現在筆者が用いている描画作品の例は、自身の非常に限定された臨床経験にもとづいてなかば直観的につくられたものである。授業場面でこれらの作品群は有効に使われているが、作品の数や描画が最適な例であるかどうかの科学的な検討はなされていない。対提示の際の発問とあわせ、今後検討していきたい。

（付記）本稿は、本大学院の臨床心理基礎実習他の受講生、共同担当の教員、相談室スタッフおよび来談者の直接間接の指導・示唆によってできたものであることを記し、改めて感謝の意を表したい。

4．参考文献

C,KOCH. 林　勝造　国吉　政一　一谷　彊訳　1970「バウム・テスト－樹木画による人格診断法」日本文化科学社

松原達哉　楡木満生　共編　2003「臨床心理学シリーズ③臨床心理アセスメント演習」　培風館

岡堂　哲雄　編　1993「増補新版　心理検査学―臨床心理査定の基本―」垣内出版株式会社

岡堂　哲雄　編　1998「現代のエスプリ別冊〈臨床心理学シリーズⅡ〉心理査定プラクティス」　至文堂

氏原　寛　成田　善弘　共編　2000「臨床心理学②　診断と見立て［心理アセスメント］」培風館

氏原　寛　小川　捷之　東山　紘久　村瀬　孝雄　山中　康裕　共編　1992　「心理臨床大事典」　培風館

キーワード；心理アセスメントに関する実習　バウムテスト　架空の樹木画作品の対提示

要約

わが国の大学における心理査定に関する教育は、これまで実施法・解釈法その他の概説のあとひたすら実践するという方法がとられてきた。この方法は、臨床心理士養成へのニーズの高まりや倫理面で問題をはらんでいる可能性がある。また初学者は、解説書に基づいて所見を作成する段階でつまずくことが多い。これらの問題に対応するために考えられた、筆者が作成した架空の樹木画作品の対提示を用いたバウムテストの解釈仮説の立て方の実習につ

いて報告し、初学者が、検査結果に主体的に関わりこころを動かしてアセスメントができるような、体験と解説書とを橋渡しする試みを考察した。この実習の特徴として以下の５点が挙げられる。①体験的に心理検査の成り立ちについて学習できる。②心理検査の解釈仮説の立て方を体験的に学習できる。③心理検査実施の基礎全般について体験的に学習できる。④筆者が描いた架空の描画作品を用いることで、学習に柔軟に活用できる。⑤受講者のレディネス、志向、授業時間によって学習内容を工夫できる。

Practices composing one s view of Baumtest by paired showing of fictional tree-drawings method for beginners

KATAMOTO, Eri.

Key words ; psychological assessment practices, Baumtest, paired-showing of fictional tree-drawings

Summary : In Japan, typical psychological assessment training was introduction of how to operate and interpret tests, and sufficient practice by the trainees themselves. This method may lead to two kinds of problems: an ethical one, and the suitability for the training up of many good clinical psychologists. Many beginners fail to form their views and opinions according to the guidebooks.

The Author invented a new method to solve these problems help: Practices Baumtest interpreting by paired-showing of fictional tree drawings. This method will relate the trainees experience and the guidebooks, so they can commit the process to making interpretion from their heart.

This method has five merits as follows:

1. Trainees can study through their own experiences during the practices, how the psychological tests were composed and refined.
2. Trainees can study through their own experiences during the practices, how to form their own views and opinions.
3. Trainees can study through their own experiences during the practices, the basic topics of psychological assessments in general.
4. Trainers can use the fictional drawings in this method more flexibly than the drawing in real cases.
5. Trainers can devise this method flexibly for the variety of the trainee s readiness, orientation, and time table.